1ST
CELEBRATE HANUKKAH

雅歌 (1) 花嫁の霊性

2022. 12.19(朝)

「ハヌッカーの祭り」の大切な視点

1.「スッコート」と「ハヌッカー」の祭りは、
　二つで一つであること

2. キリストの花嫁は、ストイケイアから
　完全に脱却すること

3. 花嫁の献身は、神への「芳しい香り」であること

1. ベレーシート ①

●「雅歌」を、「花婿なるキリスト」と「キリストの花嫁である教会」との愛のかかわりを預言的に歌った歌として理解したいと思います。

●雅歌はヘブル語で「シール・ハッシーリーム」(שִׁיר הַשִּׁירִים)で、直訳は「歌の中の歌」(song of songs)です。「多くの歌の中の最高傑作としての歌」、あるいは「珠玉の歌」を意味します。単数形と複数形を並べるこうした表現は、ヘブル特有の強調表現です。今回は1章1～３節までを味わいます。その中に登場する「口づけ」「愛」「ぶどう酒」の語彙が複数形として強調されています。

●「ソロモンの雅歌」(1節)とあれば、普通はソロモンが書いたと思われますが、必ずしも彼が書いたと理解する必要はありません。原文では「アシェル・リシュローモー」(אֲשֶׁר לִשְׁלֹמֹה)とあり、これは「ソロモン流」「ソロモン風」といった意味で、ソロモンという人物以上に、その名前がもっている語幹である三つの子音שלם から醸し出される格調さに特徴づけられます。

1. ベレーシート ②

(1) 動「シャーレーム」(שָׁלֵם) 無傷である、完成する、報いる、償う、誓いを果たす
(2) 形「シャーレーム」(שָׁלֵם) 自然のままの、完全な、平和な、豊かな
(3) 名「シェレム」(שֶׁלֶם) 交わりのいけにえ (神と人とが会食して交わるための)
(4) 固「シャーレーム」(שָׁלֵם) エルサレムの別称
(5) 固「シェローモー」(שְׁלֹמֹה) ソロモン
(6) 固「シューラッミート」(שׁוּלַמִּית) シュラムの女(雅6:13) 「平和をつくる花嫁」
(7) 名「シャーローム」(שָׁלוֹם) 神と人のかかわりの祝福を総括する語彙

平和、繁栄、十全、完全。

●以上のように見るなら、固有名詞の王である「ソロモン」はその一つの面でしかありません。神と人とのかかわりのイメージ、神のご計画の視点から見るイメージは、「ソロモン風的な格調を持つ」傷なきかかわりであり、ありのままの豊かなかかわりの回復であり、全く一つとされた十全で完全なかかわりであり、それがエルサレムにおいて、まことの王である方によって完成されるかかわりだと言えます。

1. ベレーシート ③

●まさに「ソロモンの雅歌」の格調は、そのような愛のかかわりを歌った預言的な歌であると同時に、雅歌の全体の「タイトル」とも言えるのです。「雅歌」の存在の輝きは、その前に置かれている「伝道者の書」における悟り、すなわち「空の空、すべては空」というこの世において、心満たすものは、神との崇高な愛のかかわり以外にないという事実を突き付けているように思われます。

●雅歌の特徴は五感によって味わう語彙が多いことですが、あくまでも霊的な感覚です。

(1) 触覚・・「口づけ」
(2) 嗅覚・・「香油の香り」(さまざまな香料)
(3) 味覚・・「ぶどう酒」「甘い」
(4) 視覚・・「あなたの目は鳩のよう」
(5) 聴覚・・「愛する方の声」

五感における象徴のすべてを通して味わう崇高な愛のかかわりが、雅歌の世界です。

2. テキスト

【新改訳2017】雅歌1章2～3節

2 あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。
あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、
3 あなたの香油は香り芳しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。
そのため、おとめたちはあなたを愛しています。

ישקני	מנשיקות	פיהו	כי־טובים	דודיך	מיין:	
イッシャーケーニー	ミンネシーコート	ピーフー	キー	トーヴィーム	ドーデーハー	ミッヤーイン
彼が私に口づけするように	口づけから	彼の口の	まことに	良い	あなたの愛は	ぶどう酒より

לריח	שמניך	טובים	שמן	תורק	שמך	על־כן	עלמות	אהבוך:
レレーアッハ	シェマーネーハー	トーヴィーム	シェメン	トゥーラク	シェメハー	アルヘーン	アラーモート	アヘーヴーハー
芳しい	あなたの油は	良い	油	注がれる	あなたの名は	それゆえ	おとめたちは	あなたを愛している

3.「私に口づけしてくださったらよいのに」①

●「口づけする」という動詞の「ナーシャク」(נָשַׁק)の未完了形が使われています。未完了形は願望・懇願・要請などを表しますから、ここでは「口づけしてほしい」という願いが言い表されています。「口づけ」と訳された「ネシーカー」(נְשִׁיקָה)は、「あの方」である花婿のことばを意味しています。「口づけ」が複数形の「ネシーコート」(נְשִׁיקוֹת)になっているのは、その渇望の熱烈さを表現するためのヘブル的強意法です。そのイメージを表すために、フランシスコ会訳では「熱い口づけ」と訳し、NEB訳では「口づけで私を窒息させるほどに」と訳されているほどです。

●イスラエル建国の父にして初代首相であったベン・グリオン氏は、「聖書を翻訳で読むのは、愛する恋人にハンカチーフの上からキスするようなもの」と言ったようですが、ここでの「口づけ」は、間に誰をも通さず、花婿との個人的・直接的なふれあいを願っています。これは訳語ではなく、原語で味わう世界のすばらしさがたとえられています。

3.「私に口づけしてくださったらよいのに」②

●雅歌での「口づけ」は、父親が放蕩息子を抱いて口づけ(ルカ15:20)したのとは異なります。その口づけは赦しと受容のしるしです。また、イスカリオテのユダがイェシュアにした「口づけ」とも異なります(マタイ26:49)。そもそも「口づけ」するとは、花婿と花嫁が顔と顔を合わせてする行為です。「口づけ」は個人的な愛を表すものです。そのような関係を花嫁は持ちたいと願っているのです。

●それは神のみおしえ、あるいは花婿をとおして語られる神のことばの真意が直接的に啓示されることの強い願いを表しています。事実、花婿イェシュアの口から語られる一つひとつのことばは「霊であり、いのち」です。花嫁が花婿の熱い口づけを求めるのは、花婿の心と思いを知ろうとする熱意のためです。花嫁の唯一の願いは花婿を個人的に知る(「ヤーダ」יָדַע)ことなのです。しかし今、花嫁は花婿の顔がぼんやりとしか見えていませんし、ことばの真意も一部分しか知らされていないのです(Ⅰコリント13:12)。しかしやがて花婿が来られて、顔と顔を合わせる時には、すべてをはっきりと見る(=知る)ことができるのです。花婿に対する愛は、神のことばの真意を求めることであり、またそれを切望することです。それが花嫁の霊性なのです。

3.「私に口づけしてくださったらよいのに」③

●「あの方が私に口づけしてくださったらよいのに」という花嫁の霊性は、乳だけを飲む幼子のようではなく、堅い食物を必要とする成熟した人のものです。乳を飲んでいる幼子は、神とのより深いかかわりを意味する義の教えに通じていません。またそれを求めようともしないのです。ですから2節のことばから神のみことばの奥義が啓示されることを切に待ち望む花嫁の姿が浮かび上がってくるのです。それは花婿との直接的な口づけを通して、顔と顔を合わせる希求とも言えます。それゆえ、たましいではなく、霊によって花婿のことばを理解する必要があります。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙4章12節
神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

4.「ぶどう酒に勝る花婿の愛」①

【新改訳2017】雅歌 1章2節後半

「あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく」

●花婿の愛はこの世の喜びや楽しみを象徴する「ぶどう酒」よりもはるかに勝る、麗しいものだと花嫁は告白しているのです。聖書における「ぶどう酒」は「口づけ」と同様、人の心を喜ばす神のみおしえ(「トーラット・アドナイ」תּוֹרַת יְהוָה)の象徴です。神のみおしえがなぜ「ぶどう酒」にたとえられるのかと言えば、それを飲む人の心を喜びで酔わせ、生命力を与えて、まなざしにも行動にも新しい輝きを帯びさせるからと言えます。

●詩篇19篇がそのことを預言的に啓示しています。詩篇19篇と詩篇119篇は「みことば詩篇」で、イスラエルの民に対する、捕囚経験による神の取り扱いの結晶です。これらはメシア王国を預言した預言的詩篇なのです。

4.「ぶどう酒に勝る花婿の愛」②

【新改訳2017】詩篇19篇7～10節(原文は8～11節)

7【主】のおしえは完全で たましいを生き返らせ
【主】の証しは確かで 浅はかな者を賢くする。
8【主】の戒めは真っ直ぐで 人の心を喜ばせ
【主】の仰せは清らかで 人の目を明るくする。(共同訳「目に光を与える」)
9【主】からの恐れはきよく とこしえまでも変わらない。
【主】のさばきはまことであり ことごとく正しい。
10 それらは 金よりも 多くの純金よりも慕わしく (霊的視覚)
蜜よりも 蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。 (霊的味覚)

●神のみことば(主のおしえ、主の証し、主の戒め、主の仰せ)の効用の素晴らしさを、霊的視覚において「慕わしい」、霊的味覚において「甘い」と表現しています。つまり、7～9節で語られている「たましいを生き返らせ」「浅はかな者を賢くする」「人の心を喜ばせ」「人の目を明るくする」という事柄を、「慕わしい」「甘い」と表現しているのです。

4.「ぶどう酒に勝る花婿の愛」③

●ここで使われている「甘い」は形容詞の「マートーク」(מָתוֹק)で、旧約では12回、詩篇ではこの箇所だけです。「甘い」とは美味しい、心地良いという意味です。箴言16章24節には「親切なことばは蜂蜜。たましいに甘く、骨を健やかにする」とあります。しかし神のみことばはそれ以上のものです。

●「それらは・・蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い」とはどういうことでしょうか。「蜂蜜」だけでも十分に甘いはずですが、適量の塩が入ることでその甘さは一段と増します。その塩とは「奥義」を意味しています。

●多くの奥義を啓示され、神のことばを完成させたパウロが「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい」(コロサイ4:6)と言っています。ここでの塩味の効いた甘いことばこそ、奥義を含んだ神のことばなのです。

4.「ぶどう酒に勝る花婿の愛」④

●まさにこのような「甘いことばである【主】のみおしえ(トーラー)」を語ってくれたのは、「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人」(詩篇1:2)、つまり「その人」(「ハーイーシュ」הָאִישׁ)しかいません。「その人」とは、御父から遣わされた御子イェシュアです。イェシュアの口から出る数々のことば(「レーマ」ῥήμα)は「霊であり、いのち」であることを、イェシュア自身が語っています(ヨハネ6:63)。

●しかも「いのちを与えるのは御霊です」(同)。イェシュアは死からよみがえられて、「いのちを与える御霊」(Ｉコリ15:45)となって私たちの霊を回復させ、私たちの霊の中に入って来て下さっています。これはすでに包括的になされているのです。それゆえ、イェシュアのことばは、たましいではなく霊の中で、信仰によって聞くときに私たちにいのちをもたらします。それゆえ、花婿イェシュアの数々のことばとその真意をひたすら求める花嫁の願いが、「口づけしてくださったらよいのに」というフレーズなのです。

4.「ぶどう酒に勝る花婿の愛」⑤

●神のトーラーは決して命令や禁止事項や罰則を並べ立てたものではなく、本来は、人に対する神ご自身を啓示するものです。トーラーを命令や禁止事項や罰則にしてしまったのは、パリサイ派や律法学者たちです。イザヤの「主のしもべの歌」にあるように、イェシュアは「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。 衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する」(イザヤ42:3～4)ために御父から遣わされました。メシアは神のトーラーによって御国を治められます。そのために、新創造された人の心の中に神のトーラーを書き記し、朽ちないからだに造り変えて神のみこころを成就できるようにします(エレミヤ31:33～34)。これがエレミヤの「新しい契約」(בְּרִית חֲדָשָׁה)です。

●御国の基調は「喜びと楽しみ」です。その意味において、この世の喜びを象徴する「ぶどう酒」にまさる「あなたの愛」(「ドーデーハー」דֹּדֶיךָ)は「至上の愛」となるのです。雅歌の「ぶどう酒」(「ヤーイン」יַיִן)は、地上に勝る花婿の愛を引き立たせる比喩にしか過ぎません(1:2, 1:4, 4:10, 5:1, 7:9, 8:2)。

5.「あなたの名は注がれる香油のようにかぐわしい」①

●「香油」(「シェメン」שֶׁמֶן)も愛を表す象徴です。「口づけ」「愛」も複数形でしたが、「あなたの油」も複数形(「シェマーネーハー」שְׁמָנֶיךָ)が用いられています。つまり花婿はきわめてかぐわしい香油を注がれた存在なのです。

●「香り」(匂い)はある特定の存在を指し示します。十字架の道を歩まれる直前に、イェシュアの話を悟ったベタニヤのマリアがイェシュアの埋葬のために香油を注いだ話は有名です。わずかな量でもその香りは周囲にいる者たちに分かりますが、マリアはナルドの香油の入った石膏のつぼを割ってイェシュアの頭に注いだのです。ですからその香油の匂いは家中に漂ったはずです。イェシュアの身体(頭髪、髭も含む)のみならず、その衣服にもその匂いは染み込んだはずです。ドロローサ(悲しみの道)の途上でも、十字架上でも、また埋葬されるときにも、そのかぐわしい香りはイェシュアとともにありました。高価なナルドの香油とその香りはマリアの献身の証しです。つまりイェシュアこそ最もかぐわしい花婿であることを証ししたのです。

5.「あなたの名は注がれる香油のようにかぐわしい」②

【新改訳2017】 雅歌 1章3節

あなたの香油は香り芳(かんば)しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。
そのため、おとめたちはあなたを愛しています。

●花婿の名はその香油のように芳(かんば)しく、周囲にその存在を示します。花婿が花嫁に触れてくれるだけで、花婿の良い香りは花嫁にもうつります。使徒パウロが「私たちは、・・神に献げられた芳(かぐわ)しいキリストの香りなのです」(Ⅱコリント2:15)と語ったように、キリストの香りによって「おとめたちは花婿を慕い、花婿を愛する」ようになるとあります。ここでの「おとめたち」とは「諸国の民」を意味します。花婿と花嫁の愛のすばらしさを見て、やがて異邦の諸国の民(「ゴーイム」גוֹיִם)も花婿を慕うようになることが預言されているのです。

今回のまとめ

●「口づけ」「ぶどう酒に勝る愛」「あなたの名は香油のようにかぐわしい」ことについて学びました。一つ一つのことばは味わい深いものです。これらはすべて花嫁の霊性を表しています。これを私たちは霊で受け留めなければなりません。

●「雅歌」は堅い食物です。しかし堅い食物は成熟した者たちの霊の食物です。「シェーム・イェシュア」によって、この書を通してさらなる神の奥義に触れて行きたいと願っています。